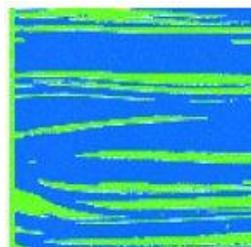


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2022年 秋号 No. 109 (2022年10月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 武藤 崇
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

若手研究者優秀発表賞を受賞して	中村 敏 2
公募企画シンポジウム: 「行動分析学本」をもっと楽しく読む方法	吉岡 昌子 4
公募企画シンポジウム: 「中動態」と邂逅してかわるもの、かわらないもの	澤 幸祐 6
公募企画シンポジウム: 刺激選好の実験的分析」シンポジウムを振り返って.....	黒田 敏数 8
公募企画シンポジウム: “実践と研究をつなぐ” ツールとしてのアプリ開発	庭山 和貴 9
書籍紹介: 『ドムヤンの学習と行動の原理 [原著第7版]』 翻訳出版について思うこと	中島 定彦10
編集後記.....	12

若手研究者優秀発表賞を受賞して

中村 敏

(神戸学院大学 心理学部)

神戸学院大学の中村と申します。この度、「等価関係の確立を通じた刺激機能の変換によって強化子の機能を獲得した未知・未経験の刺激の強化真価」という、悩んだ末にもうそのままつけてやれ！と投げ出した長ったらしいタイトルの発表を、若手研究者優秀発表賞に選んでいただきました。まずは、この場を借りて僕の発表を聞きに来ていただいた皆さんにお礼申し上げます。実は、学会発表がかなり久しぶりだったので、始まる前はすごくお腹が痛くて、こんな体調でいけんのか？という感じでした。それもあって、在籍時間を間違えて1時間前からブースに居座っていたのですが、それにも関わらずひっきりなしに皆さんに来ていただいたおかげで、いつの間にか普段通り話すことができるようになっていました。僕が受賞できた一端に、皆さんと議論することで緊張を忘れることできたという点が影響していると思います。ありがとうございます。

例年の受賞者は研究についての紹介もなされているので、僕も少少だけ紹介をさせていただきます。この研究は、一度も経験したことがなかったり、そもそも実在しなかったりする刺激が行動を制御しているように見えるときがあるけれど、それはどういう理屈でそうなっているのだろうか？と疑問を持ったところからスタートしています。たとえば、一時期より軟化したとはいえ、いまだに日常に影響を落としている新型コロナウイルスですが、比率的には多くの人は一度もかかったことがないはずで、しかしながら、それを避ける行動（マスクをつける、消毒するなど）は強力に生起・維持されています。これは、よくよく考えると、環境の変化によって行動が変容することを想定する行動分析学の基本的な考え方とは合っていないように見えます。見る人によっては、このような人に特有の現象があることから、「やはり人の行動の理解には認知的な説明が必要不可欠なのだ」と結論づけるかもしれません。ただし、行動分析学の範疇でこのような現象を説明することも可能です。その1つとして、この研究で

は刺激等価性や関係フレーム理論の刺激機能の変換という現象に着目しました。これは、刺激間に関係性が確立されると、その関係性に応じてももとは何の機能も持っていなかった刺激が特定の機能を持つようになる、というものです。たとえば、強化子として機能している刺激 A とそのような機能を持たない中性的な刺激 B との間に等価関係が確立されると、刺激 B が強化子として機能するようになる、という感じです。この考えを拡張すると、先の例のような一度も経験したことのない刺激であっても、別の刺激（新型コロナウイルスの場合は、インフルエンザや副作用など）との関係が学習されることで、行動に影響する機能を持つようになるのだと考えることができます。

今回の研究で問題提起したのは、では、この新たに機能を獲得した刺激は、行動にどれくらいの影響を与えるものなのか？という点です。この点には、学習の過程が影響している可能性が考えられます。たとえば、等価関係を学習した場合は元の刺激と同じくらいの効力になるはずだと予想できますし、大小関係を学習した場合は元の刺激より大きな（あるいは小さな）効力になるかもしれません。このあたりを検討するためには、強化子としての効力がどの程度のものなのかを何らかの形で数値化する必要がありますが、刺激等価性や関係フレーム理論の領域ではそのような試みは見受けられません。そこで目をつけたのが、行動経済学の数理モデルです。行動経済学では、ある強化子を得るために必要なコスト（たとえば、価格）を上げていき、その強化子を消費（購入）する量がどのように変動していくか測定します。そして、そのようなデータに特定の数理モデルを当てはめることで、強化子の真の価値（強化真価）を推定することを試みます。簡単にいうと、価格が上昇しても購入を続けるような強化子ほど価値が高いはずだ、ということになります。

以上をふまえ、今回の研究では、すでに強化子として機能している刺激（おにぎり）と、参加者が今

まで見たことも聞いたこともないよくわからない刺激(無意味綴り)との間に等価関係を確立した後、後者の刺激の価値を推定し、その価値が学習前と比較してどう変化しているか、関係づけた元の刺激の価値と比較してどうか、という点を検討しました。結論として、等価関係を確立した刺激の価値は、元の刺激と等価になる、というものでした。これ自体は当たり前だろ!という話ではありますが、それを数値化することで定量的に示した、という点がこの研究のアピールポイントとなります。今後の展開としては、等価関係ではない関係を確立した際にどうなるかを検討していきたいと考えています。たとえば、先ほど示したような大小関係を形成したとき、元の刺激と比較してどれくらい価値が大き(あるいは小さく)なるのでしょうか?このあたりを検討しようとしたとき、本研究のような形で価値を定量化することの意味が出てくると考えています。このように研究を展開していくことで、冒頭のような疑問を解消し、ヒトに特有の行動をより正確に予測・制御することができるようになるのではないかという野望を抱いています。

行動分析学会は、僕が研究者の道に進みたいと決めた学部4回生の頃からはぼろかきずに参加している唯一の学会です。そこで賞があるなら当然とりたい、と思ってしまうのはしょうがないことだと思います。なので、発表中やその前後はしれっとしていた(つもりな)のですが、内心はうおおお優秀発表賞欲しいいいいいいいという感じでした。というわけで、めちゃくちゃ嬉しいです!ある人のおかげか副賞もありましたし!今回の受賞で大規模な強化を受けたので、しばらくは学会に入り浸る行動が維持されてしまうと思われそうですので、またお会いした際はよろしくお願ひいたします。最後に、この機会を作ってくださった若手会、選考委員会、大会準備委員会の方々に感謝を申し上げて、締めとさせていただきます。

1) 事実と異なるかもしれない(のと怒られるかもしれない)ので詳しくは言えませんが、ニューズレターの92号と96号を続けて読むと僕の邪推の内容がなんとなくわかると思います。

<公募企画シンポジウム>

「行動分析学本」をもっと楽しく読む方法

吉岡 昌子
(愛知大学)

2022年9月30日(金)夜8時から10時まで、日本行動分析学会第40回年次大会にて、タイトルにある公募企画シンポジウムを行いました。司会は、編集委員会の山岸直基先生、話題提供は3つあり、順に、山本淳一先生、井澤信三先生と吉岡、藤巻峻先生、指定討論は藤健一先生がされました。紹介された本と話題提供の内容は以下のものです。

山本先生：「ことばと行動」各章について現代的意義の解説ダイジェスト

井澤先生：「行動分析学辞典」第1版の編集の経緯、読みどころ

吉岡：認知行動療法との比較による「行動分析学事典」の特徴を活かした読み方の提案

藤巻先生：「Rではじめるシングルケースデザイン」製作の背景から使いどころ、今後の展開まで

これらの話題提供の後、藤先生の指定討論では、山本先生には「本書を『ユニーク』あらしめている点は？」、井澤先生と吉岡には「事典の刊行で難渋した作業やその解決と未解決点は？」、「初版と改訂版など、版の比較の『楽しみ方』と『意味』は？」、藤巻先生には『本の普及』と『技法の普及』との関係は？」といった質問がなされました。加えて、全員に「今まで読んだ本の中で、『行動分析学の本』を楽しく読む道しるべとなった本」を挙げるというお題が出ました。

討論では異なる質問への回答に交差する点があり、少しまとめておきます。今回とりあげた3冊は、学会内だけでなく、他領域への行動分析学の普及を明確なミッションとしています。このことは、「本の出版は独立変数であり、従属変数は他の学問領域に与えた影響である」という山本先生の指摘に、端的に表されていました。やりとりの中で、ミッションを達成するには、本をそのまま他領域に紹介するだけでは理解は広まらないという認識が共有され、

何をすべきかについて、シングルケースデザインを題材に2つの提案がありました。1つは、当該の領域で受け入れられる言葉(例えば、臨床実験)に言い換え、そのフィールドで機能する言葉を使っていくこと、もう1つは、他領域で妥当な方法として受け入れられる共通語として、統計法を用いるというアプローチが、前者は山本先生、後者は藤巻先生から話されました。後者については、①個々の現場に応じて、妥当性の高いデザインを柔軟にアレンジできるシングルケースデザインのよさが、現在、提案されている効果量の指標では、あまり考慮されていない面があり、なかなか広まっていないこと、そのため、②新しい統計法を開発する研究者と、現場のユーザーが交流し、実際に現場で使ったフィードバックを開発者に行い、問題を解決する循環的なやりとりが、今後、必要であるという指摘もありました。同じく事典のほうでも、初版では時間がとれなかったが、第2版では用語間の関係性を整理し、全体構造を洗練する必要性が井澤先生から指摘され、質疑応答では、提示型・除去型と出現・消失という用語の使用についてのやりとりもあり、今後の課題を参加者のみなさんと共有できたことはよかったと思います。

「道しるべとなった本」に対する回答では、先生方に共通していたのは、その本を仲間と読んだということでした。先輩・後輩や同期、大学をこえた仲間と読むことで、分からないことを誰かが助けられたり、一緒に悩んで思考を鍛えられたりするなど、今の若い方もそうされているでしょうか。もう1つ、興味深かったのは、藤巻先生がコルバートの「脊椎動物の進化」を挙げられた折、山本先生が「ニューロにいかない生物学」と行動分析学の親和性について言及され、Fantino & Loganの「The Experimental Analysis of Behavior: A Biological Perspective」を挙げられたことです。生物学と行動分析学は、個体の時系列データの取得や図表現という点でも共通項は多く、

このように近接分野の本が取り上げられることは、それを読まれた方に新たな研究の着想をもたらすかも知れず、ワクワクするものでした。

そろそろ本記事もまとめに入ります。今回、話題提供で取り上げた3冊は、次の展開に進もうとしています。入手困難となっている「ことばと行動」は、2023年夏に金剛出版から復刊される予定です。復刊本の巻末には、山本先生による各章の現代的意義も加えられますので、乞うご期待！「行動分析学事典」は年次大会の場で新しい事典編纂委員会の発足がアナウンスされ、第2版に向けて活動を始めまし

た。「Rではじめるシングルケースデザイン」については、著者の藤巻先生によれば、解析パッケージに対する改善案など意見を募集し、それをもとに本の内容を更新し、サポートページを充実させていく予定とのことです。いずれも動きがありましたら、学会のウェブサイトで発表していきますので、お楽しみに。

最後に、当日は大会オンライン企画の最終日で、お疲れもたまっていたと思いますが、88名の方が参加してくださいました。ありがとうございました。

<公募企画シンポジウム>

「中動態」と邂逅してかわるもの、かわらないもの

澤 幸祐

(専修大学 人間科学部 心理学科)

第40回日本行動分析学会大会において、「中動態、行動分析学と邂逅す—行動分析学を再検証する—」という公募シンポジウムが開催され、僕は話題提供者として登壇しました。企画者の武藤崇先生から話題提供の依頼があったときには「なんで私が中動態？」とも思いましたが、わが師匠の今田寛先生（関西学院大学名誉教授）が「頼まれた仕事は受けなさい、自分には無理と思っても背伸びして取り組めばいいことがある」とおっしゃっていたことを思い出し、悩んだ結果お引き受けした次第です。ちなみに、依頼をいただいてから内容について確認し、お引き受けしますと返事をするまでの時間はやりとりの履歴を確認したところ49分でした。悩んだ後がうかがえます。

みなさんは、中動態という言葉が今回の企画前からご存じでしたでしょうか。僕は「りろんはしってる」というくらいの体たらくだったので、あわてて國分功一郎「中動態の世界 意思と責任の考古学」を読み直して一から復習しました。改めて勉強しなおした結果、「あーこれは行動分析学だわ、そりゃどこかで取り上げるべきネタだわ」と感じ入った次第です。

そもそも中動態は、能動態・受動態と同じく文法用語で、言語学の話題です。それが「自らの意思で行動するとはどういうことか、自らの意思で行動しているのではないならば責任とはいかにして生じるか」といった問題が結びつき、さらに薬物依存など様々な「思うように行動できない」といった状態の当事者研究とも接続されていったことで、言語学の枠を超えて大きなブームとなりました。それがなぜ行動分析学の話題となるのかは、シンポジウムをご覧になっ

ていただいた方はわかると思います。ここで改めて中動態とは何かを説明することはしませんので、ぜひ「中動態の世界」をお読みいただければと思います。この本で紹介されている「中動態」は、元々の言語学における中動態の範囲を超えた部分がある意味で拡大解釈されているようですが、それでも（だからこそ？）とても面白い本です。

さて、シンポジウムのタイトルは「中動態、行動分析学と邂逅す」だったわけですが、行動分析学者のみなさんはいかがだったでしょうか。とりあえずシンポジウムにご参加いただければ個人の水準では邂逅したわけですが、そこから何かを得ることはできたでしょうか。

先だって、行動分析学研究の誌上で「方法論的行動主義と徹底的行動主義の接続」という、水と油を混ぜてみましよう的な意見論文を出したところ、「それは行動分析学の役に立つ試みなのか」といった意見をいただきました。ごもつともです。行動分析学は行動分析学で自足しているのに、改めて立場の違うものを取り入れるには、それなりのメリットがないと釣り合いませぬ。僕なりにそのメリットを示したつもりではあったのですが、十分だったかどうかは皆さんの判断にゆだねたいと思います。「中動態」という話題にしても同じで、行動分析学が中動態と邂逅した結果として、そこから行動分析学にとって何かのメリットがあればよし、なければ「そういう話もあるのね」といづれ忘れられていくことになるかもしれません。

実際のところ、中動態という話題は行動分析学とは密接な関係にあるといえますか、行動分析学が問題としてきたこと、あるいは徹底的行

動主義が主張してきたことのパラフレーズである、とみなすこともできそうに思えます。シンポジウムに参加された方のなかには「これは新しい話なのか」という感想を持たれた方もおられたかもしれません。これはこれでごもつともです。中動態という話題のなかには、行動分析学がすでに内在化しているものも含まれており、その意味では中動態という話題と行動分析学の親和的な部分にのみ注目すると「味方が増えた！」といった感想になる可能性もあります。

一方で、僕の話提供にしても大森先生の話提供にしても、「中動態という話題があって行動分析の主張と似てるよ」という論旨のみにはなっていなかったのではないのでしょうか。むしろ、行動分析学で扱いにくかった部分、例えば広く受け入れられているオペラント・レスポンドの区別では明確な判断が難しい現象をとらえるための道具立てとして、あるいは行動の制御関係について徹底的行動主義のエッセンスを踏まえつつも違う側面を見るための新しい視点として、という内容であったと思います。これは ACT について取り上げられた武藤先生の話提供でも同様です。シンポジウムの話提供について事前に綿密に打ち合わせをしたというわけではないのですが、「中動態という視点を導入することで行動分析学の研究対象（行動）の見え方を変えてみる」という方向は暗黙かつゆるやかに共有されていたように思えます。増えたのは味方ではなく見方なわけです。はい、うまいこといった。

今回のシンポジウムの指定討論者についても

触れないわけにはいきません。指定討論者として、畏友・高橋英之先生（通称・ひでまん）が登場しました。といってもみなさんは彼の姿ではなく、イヌのアバターしかご覧になっていないわけですが、実物を知っている僕としては「まあどっちでも似たようなものなので」というところです。高橋先生は行動分析学会の会員ではなく、また行動分析学者でもありません。主たる研究発表の場は認知科学会であり、行動分析学会で何かを話すというのは、それこそ水と油を混ぜましようといった風情です。高橋先生のこれまでの研究について詳細に紹介はしませんが、その特徴は「新しい技術・手法をどんどん取り入れ、面白い問題設定に基づいてとにかく前に進んでみる」といった具合です。中動態についても話題になり始めた時期から注目しておられ、「好きなアイデア」ともおっしゃっていました。行動分析学とは明らかに違う観点で研究をされてきた高橋先生が、行動分析学の主張と親和性の高い中動態というアイデアを通じて行動分析学者と同じフィールドで議論ができたというのは、少なくとも僕にとっては大きな意味がありました。味方が増えましたね。

最後に、企画者であり司会者でもある武藤先生に感謝したいと思います。こういう機会でもないと、思想系の話題について改めて勉強して世界の見方を変えるようなことはなかなか難しく、いいきっかけを与えていただきました。参加いただいたみなさんにとっても、世界の見え方が少し変わるような経験になっていればいいなと思います。

<公募企画シンポジウム>

「刺激選好の実験的分析」シンポジウムを振り返って

黒田 敏数

(国際電気通信基礎技術研究所 (ATR))

今年の年次大会では『刺激選好の実験的分析：「それってあなたの好みですよ？」を超えて』というテーマで、シンポジウムを行いました。発表者は長谷川さん・空間さん・黒田の3名で、指定討論者は是村さんでした。長谷川さんは、ヒヨコの刻印づけを用いたオペラント条件づけと、その延長としてBiological motionを使った動き刺激に対する選好の研究計画を発表されました。空間さんは、衝動性やセルフコントロールに関連付けられることが多い、遅延価値割引とマシュマロテストの手続きを比較しながら、前者では強化子量を操作するのに対し、後者では選好の強さが異なる刺激を扱うことを指摘されました。僕自身は、個体間の動きの随伴性を操作することで、他個体への選好が変化する実験結果を報告しました。

シンポジウムでは議論したいと考えていたことをうまく話し合えなかったため、この場を借りて、少しお話させていただきます。まず企画趣旨と言いますか、大きなテーマとして、「行動分析学の枠組みを超えて、もっと外に目を向けよう」という考えがありました。学会のシンポジウムですので、専門的なことを議論するのは当然なのですが、その学会自体も、社会の中にある1つの組織に過ぎません（・・・と言うと偉そうに聞こえるかもしれませんが）。社会の中で求められていることに取り組みないと、どんなに優れた哲学や理論、データを持っていても、外の世界では相手にされません。たぶん、行動

分析学は今、そういった危機的状況下にあると考えています。その点で、刺激選好は、行動分析学と外の世界が歩み寄れるテーマの1つだと考えていました。刺激選好とは、いわゆる「好み」のことですが、食べ物・ファッション・インテリア・人間関係など、あらゆる場面で見られる普遍的な行動現象です。また、そうであるからこそ、各業界では顧客や相手の好みを知ることしにのぎを削っています。しかし、そこに行動分析学の専門家はいるのでしょうか？

行動分析学の一番の強みは、刺激の使い方のうまさだと、僕は考えています。行動を制御している環境を、先行刺激・後続刺激・確立操作に分類し、後続刺激については、その呈示方法をスケジュールという概念で整理しています。しかし、残念ながら、社会の中で実際に環境を操作する技術や権限をほとんど持っていません。このままでは、宝の持ち腐れです。だからこそ、行動分析学の専門家は基礎・応用を問わず、外で積極的に営業（働きかけ）をしないとけません。営業するには、相手が話す言葉を学ばないとけません。（新しいことを学ぶ姿勢はありますか？）どこで営業すべきかは、もっと社会に目を向けないと分かりません。（マクロな視野を持っていますか？）「どうすれば社会の中で行動分析学の評価を高められるか？」、「どの分野・業界なら、始めやすいか？」、「どうアプローチすべきか？」・・・そういったことをシンポジウムで議論したいと考えていました。

<公募企画シンポジウム>

“実践と研究をつなぐ” ツールとしてのアプリ開発

—「科学技術イノベーションがつなぐ実践と研究」に登壇して—

庭山 和貴
(大阪教育大学)

第40回年次大会の公募企画シンポジウム「科学技術イノベーションがつなぐ実践と研究——アプリを活用した応用行動分析学——」において、話題提供させて頂きました。企画者は熊仁美先生、話題提供は大森貴秀先生、熊先生、庭山、指定討論は井上雅彦先生でした。企画者でない私がニューズレターに寄稿させて頂くのは恐縮なのですが、貴重な機会を頂戴したので登壇して考えたことを書かせて頂きます。

まず、本シンポジウムのタイトルに「研究と実践をつなぐ」ではなく、「実践と研究(をつなぐ)」とあることが実際に行動分析学会らしいと感じています。「研究と実践をつなぐ」と表現した場合には、研究によって効果が実証された介入法を実践現場で活用してもらうにはどうすればよいか、といったニュアンスが強いのではないのでしょうか。これに対して「実践と研究をつなぐ」と表現した場合には、実践現場においても介入効果をデータに基づいて検証し(事例研究を行い)、それをもとにより大規模な研究や厳格な研究デザインに繋げる、というニュアンスが強くなる気がします。

本シンポジウムにおいて紹介されたアプリは、「実践と研究をつなぐ」というタイトルを反映してか、すべて実践現場における行動データの入力・分析(グラフ化)を支援するアプリでした。実践現場においてもシングルケースデザインを用いて効果検証することを求める応用行動分析学の特徴は、研究→実践という方向だけでなく、実践→研究という方向性も明確に生み出すことを改めて感じました。個人差や個人内変動がある対象者一人ひとりの利益に確実に繋

げ、さらに実践知を集積していく上で、これはやはり重要な「強み」であると思います。

この行動分析家にとっては「当たり前」であることを、実践現場において(あるいは他分野の研究者・実践家も)幅広く行えるようにする上での障壁の一つが、行動データの記録とその分析にかかるコストです。そして、アプリ活用によって、この記録と分析のコストを下げることができるのは、単にこれまでより便利になるだけに留まらず、「実践と研究をつなぐ」ことをより大規模に推し進める上で必須だと考えます。この際、指定討論の井上雅彦先生が仰っていたような記録と分析の「完全自動化」をめざす方向性と、それが難しい場合の「記録者の日常業務を課題分析して、その行動連鎖の中に記録行動を埋め込む」方向性の2つがあるように思います。今後、科学技術の発展、標的行動の性質、記録機材のコスト、記録者が日常的に使用しているツールなど、様々な要素を考慮しながら開発を進めていく必要があります。

また、アプリを開発・維持していくためには、持続的な研究開発環境をいかに創り出すかも重要です。私がシンポジウムで紹介したアプリは、オレゴン大学のPBSに関する研究・開発チーム(<https://www.pbisapps.org>)が開発したアプリの日本版として開発したものです。オレゴン大学のチームには、研究者以外に20名弱のアプリ開発チームが専属であり、それを支える収入源も確保されていて、持続的な研究開発環境が構築されています。日本においても、こうした環境をどのようにしたら創り出せるのか、様々な方と連携しながら考えていきたいと思っています。

<書籍紹介>

『ドムヤンの学習と行動の原理 [原著第7版]』

翻訳出版について思うこと

中島 定彦

(関西学院大学文学部)



マイケル・ドムヤン著／漆原
宏次・坂野雄二監訳
北大路書房(2022年10月刊)
定価 7,920 円(税込)

2年前に出版した拙著
『学習と言語の心理学』

(昭和堂)の序で、私は次のように書いた。「英語圏の大学で採用されている心理学概論教科書の『学習』の章や、専門科目である学習心理学の教科書でおもに取り上げられているのは、ヒトを含むすべての動物に共通する学習のしくみである。これが学習心理学の講義内容の世界基準であるから、本書の多く(第2~6章)はそうした知識の解説に費やした。」ここで念頭にあった「学習心理学の教科書」とは、私の個人研究室の棚に並ぶ A.C. Catania, P. Chance, M. Domjan, S. B. Klein, D. A. Lieberman, J. E. Mazur, B. Schwartz といった斯界で名の通った研究者が執筆した大学テキストたちで、すべて数版を重ねる定評あるものである。これらは甲乙つけがたい優れた教科書だが、このうち邦訳があるのは Mazur のものだけである。

Mazur の教科書 *Learning and behavior* については 25 年前に『基礎心理学研究』(第 15 巻第 2 号、1997 年)で書評したように、私が上智大学の 4 年生の時(1987 年)に、故・平井久先生を囲んで原書初版(1986 年出版)の読書会をした際に出会った。邦訳は磯博行・坂上貴之・川合伸幸氏によって、原書第 3 版(1994 年出版)の訳として、二瓶社から 1996 年に出版された(書評

はこれについて述べたものである)。さらに、原書第 4 版(1998 年出版)の訳書が日本語版第 2 版として 1999 年、原書第 6 版(2006 年出版)の訳書が日本語版第 3 版として 2008 年に、やはり二瓶社から同じ訳者らによって出版されており、日本語で読める上級者向け学習心理学教科書として評価が高い。

上述の書評で私は「以来、半ば趣味のように、英米の学習心理学教科書を何冊か読んできたが、それらの中でも(中略)、現在出版されているものの中では、本書がベストだと思われる。」と記した。これは誇張ではないが、本邦で Mazur のみがもてはやされると、天邪鬼な私は「ほかにもいい教科書があるぞ」と言いたくなる。

さて、1988 年に上智大学を卒業し、慶應義塾大学の大学院へ進学して故・佐藤方哉先生や大学院の先輩たちから奨められたのは Catania の教科書 *Learning* だった。当時第 2 版(1984 年出版)で、紙の匂いがひどいことを除けば、Mazur に匹敵する良書であった。このため、Mazur の教科書と同じく Catania の教科書も原書の改訂版が出るたびに購入してきた(最新版は 2013 年に出た第 6 版である)。

さて、1993 年に慶應義塾大学の大学院の課程を満期退学し、日本学術振興会特別研究員(PD)として関西学院大学の今田寛先生の研究室に在籍させてもらおうと、そこでは Domjan の教科書 *The principles of learning and behavior* が院生たちに読まれていた。B. Burkhard と共著の第 2 版(1985 年出版)から Domjan 単著の第 3 版(1992 年出版)に替わった頃だった。Catania の教科書

はオペラント条件づけと言語学習を重視する行動分析学者による学習心理学テキストだったが、Domjan の教科書は現代連合学習心理学者による学習心理学テキストであった。なお、Mazur では「古典的条件づけ」と「オペラント条件づけ」、Catania では「レスポデント条件づけ」と「オペラント条件づけ」、Domjan は「古典的条件づけ」と「道具的条件づけ」という用語が主に使われている。

行動分析学では B. F. Skinner に倣って「レスポデント条件づけ」と「オペラント条件づけ」という用語を使う。いっぽう、E. Hilgard は「古典的条件づけ」と「道具的条件づけ」とした。現代連合学習理論では「パヴロフ型条件づけ」と「道具的条件づけ」と呼ぶ研究者が多い。最近、神経科学でちょっとはりの Pavlovian-instrumental transfer (PIT) という現象（といっても、条件づけ研究者の間では半世紀前から知られている現象なのだが）も、こうしたカテゴリ名に基づくものである。ちなみに、拙著『学習と言語の心理学』や実森正子先生との共著『学習の心理』では、Mazur と同じく「古典的条件づけ」と「オペラント条件づけ」としている。これは用語の由来からすれば斜交になる言葉遣いだが、前者は行動分析学者以外の学者の研究が盛んで、後者は行動分析学者による研究が盛んなことに鑑みたものである。野球では「読売一阪神」や「巨人一猛虎」ではなく「巨人一阪神」だし、テレビ番組名に冠したタレント名も「明石家一所」や「さんまージョージ」ではなく「さんまー所」であるから、世間でも斜交の言葉遣いは珍しいものではない。

Domjan の教科書（原書第 7 版：2015 年出版）の日本語訳が出るというニュースを聞いて、one of the best が、広く知られることを喜んだ。もう「ほかにもいい教科書があるぞ」と天邪鬼を言う必要はない。「Mazur もいいけど、Domjan もいいよね」である。なお、Domjan はより平易な入門書として、*The essentials of conditioning and learning and behavior* を著している、こちらは

2018 年出版の第 4 版が最新版である。監訳者の 1 人である漆原氏から、Domjan の教科書を訳しているということを以前から聞いていたが、てっきりこの入門書だと思っていた。

さて、著者の Domjan はラットの味覚嫌悪学習の研究でまず頭角を現した。連合選択性を明らかにした論文 (Domjan & Wilson, 1972) は有名な J. Garcia の研究 (Garcia & Koelling, 1966) よりも実験デザインにおいて優れており（詳しくは Domjan, 2015 を参照）、私の米国留学先の師である故 R. Rescorla も Garcia & Koelling に少し触れた後、具体的実験としては Domjan & Wilson を紹介していた（なお、彼は Lieberman の *Learning* を教科書指定していたが、これも良書である）。Domjan はその後、ウズラの性的条件づけ研究に軸足を移し、条件づけの進化的適応価値を論じるようになる。詳しくは Domjan & Gutiérrez (2019) の展望論文を参照されたい。

このたび出版されたのは前述のように、2015 年出版の原書第 7 版の翻訳である。Domjan は 1947 年生まれだから今年 75 歳である。さすがに第 8 版の出版はないだろう。しかし、新型コロナ流行下にあって学習心理学の授業動画をいち早く Youtube で公開し、また Rescorla の追悼集会でも意気軒昂な姿を見せていて、ひょっとすると原書第 8 版、第 9 版が出るかもしれない。

引用文献

- Domjan, M. (2015). The Garcia-Koelling selective association effect: A historical and personal perspective. *International Journal of Comparative Psychology*, 28. [online]
- Domjan, M., & Gutiérrez, G. (2019). The behavior system for sexual learning. *Behavioural Processes*, 162, 184–196.
- Domjan, M., & Wilson, N. E. (1972). Specificity of cue to consequence in aversion learning in the rat. *Psychonomic Science*, 26, 143–145.
- Garcia, J., & Koelling, R. A. (1966). Relation of cue to consequence in avoidance learning. *Psychonomic Science*, 4, 123–124

編集後記

今回は 2022 年度年次大会のシンポジウム報告を中心に記事をいただきました！ 行動分析学が扱うべき内容や来るべき姿について、そして行動分析学を楽しむこと、より多くの人に届けることについて、色々な角度から議論され、考える機会となりました。

今回の年次大会も大変チャレンジングな試みで、連日夜に開催されるシンポジウム祭りは知的刺激に溢れた充実した一週間を過ごさせていただきました。これもオンラインなら

ではの趣向ですね。シンポジウムの内容も事前に動画で視聴させていただいたことで、リアルタイム視聴ではまさに生の議論やフロアとのやりとりが充実していました。ポスター発表も、多くの人が同席できる形にアップデートされ、盛り上がっていましたね！そして念願の対面学会も！！

この調子で、コロナとの戦いが収束していくことを切に願います。

(A.K.)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。また、学術的に明らかに誤った記述、学会活動や行動分析学に全く関係のない記事、営利目的と考えられる記事（著訳書等の紹介を除く）、差別的表現や誹謗中傷が含まれる記事等については、編集部より修正を求める場合や掲載をお断りする場合があります。

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

畿央大学 教育学部 大久保研究室内

日本行動分析学会ニューズレター編集部 大久保 賢一

E-mail: kenichi.ohkubo@gmail.com